

共産主義と国際政治

中嶋嶺雄著

79 Vol.4 No.1 Apr-Jun 12号

# 『中ソ対立と現代』 木戸 蒔

中央公論社／一九七八年／二九八ページ

## 一

中ソ対立については多くが語られており、評者もそれについてまったくの門外漢ではないということ前提に、正直いって多少とも軽い気持で本書を読み始めたが、読み進むにつれて、そうした前提がとんでもない思い違いであることを痛いほど悟らされた。次つきと指摘される事実の意外さと歴史の重みにきわめて強い衝撃をうけた。まずその点を告白しておきたい。

第二次大戦末期のヤルタ体制の形成から一九五〇年代後半に至る時期にかけて、中ソ関係は、たしかに部分的な摩擦や不協和音が発生してはいたものの、基本的には中国側の「向ソ一辺倒」の立場にみられるように、強固な同盟関係を基礎とする友好的、協力的なものであった、というのが一般の見方であった。本書はそういう常識的な中ソ関係イメージを根本的に改めることをわれわれに促すだけでなく、中ソの

## 蒔

対立関係が戦後のアジアの国際環境のあり方を決定的に左右するものであった、という大胆な主張をわれわれに投げかけているのである。通常一九五八年ごろに端を発するとみられている中ソ間の対立が、じつはそうではなくて、ヤルタ協定そのもののなかに萌芽的なかたちで枠づけられており、四九年から五〇年代前半にかけての中ソ会談、朝鮮戦争、高崗事件などをめぐって両国の関係は、表面上の「一辺倒」路線とは逆に極度の緊張をはらんだものになり、五八年の激発に至るまでに対立の構図は決定されていた、というのである。さらに、スターリンの中国にたいするさまざまの野心とそれにたいする毛沢東の側の強い反発が、戦後のアジアの冷戦と熱戦のあり方を方向づけるもつとも重要な要因の一つであった、とするのが本書の基本的な主題である。

この時期、すなわち一九四五年から五九年までの期間の中ソ関係は、「まえがき」において触れられているように、わが国では従来断片的

にしか取り上げられてこなかったようである。

その原因は、戦後国際環境の歴史的特質を明らかにするというスケールの大きな作業のなかで中ソ関係を位置づける構想がこれまで乏しかったことにあるが、それ以外に共産圏研究の常として資料的制約が大きかったことにもあるであろう。本書のなかで著者は、最近米国で公開された外交文書や、文化大革命と中ソ対立の高まりのなかで公表された裏面史資料や、毛沢東の非公開文献やフルシチョフの回想録などを全面的に活用することにより、これまで隠されていた意味付けや事実の脈絡を探りだすことに成功している。

## 二

本書は全体で八つの章からなりたっている。序章「中ソ対立の構造と、地政学」では、まず中ソ対立を分析する理論的視角として、四つのレベルの対立構造が明らかにされる。それは、(1)民族の対立ないしはナショナリズムの相剋、(2)国家的対立ないしは国家エゴイズムの対立、(3)イデオロギー的対立ないしは教義上の異端者同士の対立、(4)政府間の対立ないしは外交上の対立である。これらすべては「重層的に一体化」しているが、(1)(2)の対立が歴史的に根深く、和解困難であるのに対して、(3)(4)の

それは状況の変化に応じて変動しやすいものである。そのさい、民族間ないし国家間の対立の観点からみて、モンゴル、東北（満洲）、新疆という兩國間の「接衝領域」は、双方のナショナルリズムの衝突の舞台であるという意味での

「中間地帯」を形成し、他方、朝鮮半島は一種の「緩衝地帯」だったという「地政学的状況」をまず確認することを読者は求められる。そうした状況のもとで、毛沢東はおそくまで外モンゴルが中国の一部となることを予想し、他方、スターリンは東北と新疆にもソ連影響下の政權が樹立されることを期待したのであり、そういう思惑が戦後のアジア世界をかたちづくる重要な要素となったのである。

第一章「アジアの冷戦と中ソ関係」においては、「冷戦」が朝鮮戦争前後ではなく「すでにヤルタ体制の展開構造そのものなかで発生」していたのであり、ヤルタ体制は「極東におけるソ連の著しい優位」を保証する反面、中国を「人身御供」にし、「中国ナショナルリズムの煽結する方向……をいささかも組み込んでいなかった」という点で根本的な矛盾をはらんでいたことが明らかにされる。そういうものとしてのヤルタの密約は、「東アジアの戦後国際環境の形成のプロセスを決定的に左右」したのである。しかも、アジアにおける「冷戦」は、中国の將

来を含んだ「その輪郭が不確定」であり、「ヨーロッパのように構造化されなかつた」ために、「一挙に沸騰点に達し、熱戦化せざるをえなかつた」といえる。

第二章「米中関係の心理と宿命」は、戦後のアジアの冷戦構造が形成される過程における米中間の誤算とディレンマを扱っている。米中関係は、「民族的かつイデオロギー的な深い摩擦に根ざす中ソ関係と違って」「永く培われた親和の紐帯」により結ばれてきた。アメリカのアジア政策の基調には「つねに中国にたいする十全の配慮と中国民族にたいする畏敬の念が潜んでいた」し、他方、毛沢東の側も戦争末期に、「われわれ中国人は、ソ連の援助を待ってはいない」「アメリカはたんに中国の経済開発を援助するのにもっともふさわしい国というだけでなく、アメリカは中国と完全に提携してゆける唯一の国でもある」と発言していたのである。しかし、「国共両党とともに十分満足させ得ない不透明かつあいまいな」対華政策をとっていたアメリカ政府は、国共内戦における共産党側の優勢とともに「中国チトー化」への期待と「中国喪失」への苛立ちにゆきざられ、そうしたディレンマの結晶である『中朝白書』を発表することによって、さらに激しい内外の集叩火を浴びる。トルーマン政権は、一九五〇年初

頭の中ソ交渉における深刻な亀裂を十分に見抜かず、国内ではマッカーシー旋風攻撃に出合い、「中国チトー化の喪失」に直面し、やがて「決定した政策とまったく逆行する戦略を展開することになったのである」。

この微妙な時期の中ソ関係は、第三章「毛沢東とスターリン」において取り上げられる。スターリンは毛沢東を「マーガリン・マルクス主義者」とみなし、国共内戦の期間中蒋介石政権を認知しつづけたが、それにはたいして対米宥和政策を実施していた毛沢東の側は、四九年七月に「向ソ一辺倒」を宣言して大きく方向転換をした。この方向転換のもっとも重要な要因は、著者によれば「毛沢東の強烈な対ソ・ナショナルリズムを実現するための戦術的配慮」であるとされる。同年八月以降中国各地でいささか不自然なソ連とスターリンにたいする称賛キャンペーンが進行するなかで、毛沢東は同年末から翌五〇年にかけて訪ソし、中ソ友好同盟相互援助条約が結ばれる。このモスクワ会談は、表面上の友好協力ムードとは裏はらに、新国家建設直後の最高指導者が二ヵ月も国を留守にせざるをえないほど緊迫したものであり、スターリンが「不凍港と鉄道をはじめとするさまざまな利権を要求」したのにたいして、毛沢東はのちほど「私とスターリンはモスクワで二ヵ月いい争っ

た」と語ったように、粘り強い抵抗を示したのであった。

### 三

#### 第四章「朝鮮戦争と中ソ対立」においては、

『謎だらけの戦争』である朝鮮戦争が真正面から取り上げられる。そのさい、近年アメリカ側の機密文書が公開され、すでに公刊されていた資料とあわせて、「従来の仮説や通説をあるいは覆えし、あるいは検証」することを可能にしたことが、著者がこの問題にひときわ力を入れて取り組む背景となっている。まずアメリカ政府の対応であるが、五〇年一月にそれは「韓国と台湾をもはやアメリカの戦略の対象から除外」することを決定し、「危機発生についての深刻な誤算のなかで、ひとたび戦争が勃発するや事態の重大性に驚く周章狼狽ぶり」を示し、ことに「中国参戦の可能性をまったく予見し得なかった、もしくは見くびっていた」などの点が明らかにされる。他方、共産主義陣営の側の対応であるが、著者はそれに関する「諸説」を紹介したのち、この戦争が結局は「民族解放戦争」として必然的に勃発したものであったとの「仮説」を提示し、中ソの態度に検討を加える。ことに中国に関連して、のちほど明らかにされるように中国はソ連の朝鮮戦争とのかわり方

に強い不満をもち、五〇年の建軍節には「ソ連讚美に終始していた中国首脳が、中国参戦後の翌五一年の建軍節ではもはやソ連を称えていない」ことが示されており、興味深い。さらに注目すべきことは、中国の朝鮮参戦の動機が、「ソ連軍が再び、……当時は親スターリン的な高崗支配下の東北（満洲）に一举に進駐しかねないという危惧を中国側が深刻に感じていた」ことにある、とする評価が行なわれていることである。つまり、「いまや東北の防衛こそ、台湾解放以上に中国にとって切実な課題に転じていたのであり、それは、マッカーサー戦略からの「防衛」である以上に、より直接的にはソ連の東北再占領からの「防衛」であったように思われる」とされる。そして、「朝鮮戦争が中ソ対立の重要な歴史的段階を刻んだという意味でも、この戦争は戦後国際政治史のクライマックスだった」とする主張が生まれるのである。

第五章は、「高崗事件と東北をめぐる中ソ関係」の分析にあてられる。東北地方の党、行政、軍を一手に握っていた高崗と、華東の最高指導者であった饒漱石にたいして、スターリン死後の五三年三月の時点で毛沢東は批判を行ない、五五年三月の段階になって高崗らは東北を「独立王国たらしめようとした」として公然と告発された。著者は、この事件が「中ソ間の抗

争の一環に位置づけうる重大事件であったとの仮説」を実証的に検証しようとする。そして事件の経過や中ソの高崗にたいする評価の変化について分析し、毛沢東、劉少奇、周恩来、鄧小平との関係について詳細に考証を進める。スターリンの隣接地域にたいする対外進出の方法は、東欧諸国でみられたように、「まず第一に軍事占領、第二に現政府を利用しつつその権威を奪うこと、第三には内戦や局地戦を利用しつつ相手国共産党を支持すること」にあったが、第三の点については土着の共産主義勢力が増強されることを欲せず、ソ連仕込みの親ソ派を送り込んだ。スターリンが高崗を通じて、北京の中央もしらない貿易協定を東北人民政府と結び、独自のかたちで人的交流を進めたのも、同地にソ連の影響下にある「独立王国」を築かせ、それを通じて党中央の権力を奪取させようとしたためであった。この事件に現われた中ソの角逐の根深さに改めて驚かされる。

第六章「中ソ関係の緩和と破局」においては、五三年三月のスターリンの死前後から五八年に中ソ間に破局が到来するまでの期間の中ソ関係が取り扱われる。スターリンの死後の中ソ関係は急テンポで改善され、ソ連から大規模な新規の援助が与えられた。五四年秋にはフルシチョフらが訪中し、旅順口からのソ連軍の撤退、

新疆の中ソ合弁会社解散などを含む一〇項目の宣言、協定などの文書が署名され、中国の「ソ平等化」が前進した。五六年二月のソ連共産党第二〇回大会でフルシチョフが打ち出した「スターリン批判」にたいして、毛沢東は一面で歓迎し、他面で許容しえないという「両義的な心境」を味わったが、五七年一月のモスクワ会谈のさいには両者の溝が深まった。「毛沢東にとって、ソ連共産党第二〇回大会でのフルシチョフの問題提起が最初の戸惑いであったとしたら、今回は、その戸惑いが確執へと発展した重大な契機となった」。このように確執を増していった中ソ関係は、五八年夏の台湾海峡危機をきっかけに破局へと進んでいく。七月末から八月初めにフルシチョフがマリノフスキー国防相らを伴って事前の発表なしに訪中し、中ソ連合艦隊や共同軍事電波体制の設置を申し入れたが、中国はそれを拒否したばかりか、台湾海峡の金門島砲撃を決定していたのにそれには一言も触れなかった。八月下旬の金門島砲撃はソ連の要求にたいする回答であり、中国は重大な国際危機を作り出すことにより米台関係と中ソ条約の両方の有効性を試したので、著者はいう。

危機にさいして、ダレスは「戦争瀬戸際政策」をこころみ、フルシチョフは「中国と袂を分つことを決めた」のであり、この危機は「核時代

における米中ソ模擬戦争としての歴史の教訓をさまざまな意味において現代史の一ページに刻印したのであった」とされる。

終章「中ソ対立の神話」では、まず「現代史における陥穽としての後知恵」が問題にされる。朝鮮戦争が「それにかかわった米・中・ソ三国の誤算の相乗のうえに冷戦から熱戦に転化した」ように、歴史の経路は何重もの誤算や不決断によって決定される。それを後世の歴史家は、しばしば当事者が完全情報と十分な行動能力に恵まれていたかのように評価して判断を下すことがあるが、それが「後知恵の錯誤」である。歴史の諸条件をさまざまに仮定して「if」という問いかけをするのも「後知恵」の一種だが、それに反して「歴史の文脈に根づいたif」がありうるし、そういう「if」こそ取り上げられるべきである。中ソ関係にもその題材が多い。たとえばアメリカ政府が一方で「中国チト化」の予測と期待をもち、その意味で「歴史の文脈に根づいたif」に気づきながら、それを具体的政策として実行しえなかった例などがそれにあたる。最後に著者は、「中ソの一枚岩の団結という神話」が崩壊した今日、「その反作用としてであろうか、今度は永遠の中ソ対立という新しい神話が生成しはじめている」とことを指摘し、最初に提起した理論的視角に立ち

戻る。四つのレベルの対立構造のうち、「民族的、国家的対立」の面からすれば中ソ対立はきわめて根深いが、「党間対立、政府間対立」のレベルでは「調整可能な条件がすでに出てきている」。「中ソ関係の将来を宿命的な対立の図式にのみ固定して展望することは、歴史の文脈に根づいたif」を再び見失うことになるかもしれない。

#### 四

政治学者による鋭い問題関心と歴史学者による綿密な史料渉猟をあわせもった本書については、教示されることのみ多く、批判すべき点はほとんどみうけられないのであるが、より以上の教示を得たい点をあえて二、三指摘しておくたい。

まず初めに、序章でみられた理論的視角、ことに四つのレベルの対立構造という分析方法は、本書全体にわたって生かされてはいるものの、一章から六章までの本文のなかでより目的意識的に展開されていけば、本書はもっと立体的な構成と内容をもっていたのではないかと思われる。中ソ対立の理論的掘下げはほとんどまだ試みられていない雑事業であるが、それだけに本書の著者には歴史分析にそったかたちでその鋭い問題提起を進展させてくれることを期待

しうる。

次に、著者のいう「中間地帯」、毛沢東の言葉では「二つの植民地」のうち、東北(満洲)については満足しうる全面的な考察がみられるが、もう一つの新疆についても、それと同様に精力的な分析を加えていただきたい。四四年から四九年にかけて新疆省で発生したいわゆる「三区革命」の性格は、ソ連との関係も含めて大変複雑なようであるが、少なくともそれが本書の一貫した主題のなかにどう位置づけられるのかを示してほしかったと考える。

また、小さな点ではあるが、ソ連の第二〇回党大会で「スターリン批判」を含む新路線が提起されたことにたいする毛沢東の反応は、「戸惑い」というよりはもっと強い反発ではなかったか。また同じ五六年のポーランド政変やハンガリー動乱にさいして、たしかに中国は表面的には「ソ連中心」を掲げてハンガリー事件收拾に積極的に関わったけれども、その過程をも含めて「大國ショーヴィニズム批判」を執拗に打ち出しており、事慮のなりゆき全般にたいしてき

わめて強烈な危惧と反感を抱いたとはみられないだろうか。中ソ対立の発端を第二〇回大会におく見解の誤りは本書全体が見事に証明するところであるが、にもかかわらず五六年に毛沢東の側が感じた強い違和感を、対立をもう一步進めるパネとなった要素としてもう少し大きく評価していいのではないかと思われる。

さらに、中ソ対立の持続性を展望することは容易ではないが、一方では「永遠の中ソ対立という新しい神話」を否認することに共感を抱きながら、他方、鄧小平時代に「毛沢東の対ソ認識・対ソ態度と根本的に異なっ」た「旧実権派の対ソ認識・対ソ態度」が復活すると予測するのにもためらわざるをえない。毛沢東のような感情的な対ソ反感が背後に退く反面、「四つの現代化」の進行に伴いナショナリズムの気運は少なくともかなり長い期間ますます強まり、著者の分類でいえば「民族間対立、国家間対立」の基盤がむしろ強化されるとみるのは不自然であらうか。

全体を通して叙述の重複がいくらかみられ、

いささか気になったが、それは比較的短い期間のもつれであった中ソ関係に多方面から照明をあてる作業においては、避けられないことかもしれない。

ともあれ、こういう学術的な書物によくみられるような論文集ではなく、「全部で約六五〇枚の書き下し原稿から成っている」本書は、それだけ一貫した構想と充実した実証ですべてが統一されており、読者をとらえて離さない魅力をもっている。終章にいうように、「ヤルタ体制の形成から五〇年代後半の秘められた中ソ決裂にいたる時期の中ソ関係は、その『正史』と『裏面史』のパラドックスという点においても、現代史におけるもっとも刺激的な国際関係であった」。われわれはここに通史としての『裏面史』を手にしてこれまでの「正史」がいかに虚構のうえに築かれていたかを痛感せざるをえない。その意味で、本書は共産圏研究に関心を抱くすべての人にとって、貴重な資産となるであらう。

(まこと・しげる 神戸大学)